

Second Sky

風はね、旅人なの。
だから、どこにでもいける。どこにでもいるのよ。

サークル『飛ぶ黒猫』
執筆・渡瀬 由

体験版

セカンド・スカイ

・・・・・・・・三

○本編の六ページまで読むことができます。

青く澄んだ空を、爽やかできれいな風が有機的に壊れた大地を包み込みながら駆け抜けていく。

荒涼とした大地にそびえ立つのは自然の山々ではなく、崩れ、灰色の塊と化した高層ビル群。アスファルトの道路は崩れ落ちて、無残に放棄された自動車の残骸だけがこの街の住人となっている。かつての繁華街も見る影はなく、ここは巨大なジオラマのセットのようだ。

少し離れた場所に大きく開けた場所がある。見渡す限りの草原が広がる先に見える小さく割れた山にはどうやって刺さったのかは解らないが、テレビの電波塔が見事に突き立てられている。自然とも不自然ともいえるこの光景は、不思議と僕の心を前へと突き動かしていく。

自然が、世界が、それとも僕たち人間がこう望んだのか。これから歩む世界はどんなものになるのか、それは誰も分からない。それでも僕は歩き続けるだろう。自分が今、何のために生きているのか、何かやるべきことが残っているのか、それを確かめるために。

「さあ、前に進むか！」

僕は大きな声を山に向かって投げた。

二〇一〇年、三月二十八日。

この日、世界各国の首相・大統領が異例の会見を行った。それはテレビ、ラジオ、インターネット動画。あらゆるメディアを通して全世界に向けて行われ、放送中のあらゆる番組はすべて会見放送へと切り替わり、街を歩く人々も突然の出来事に足を止めて画面に注視した。

「我々は、ある国際的な研究機関の指摘を受け、五年前からあらゆる技術・研究開発機関、地球科学の専門家などを交え、長く協議を行ってきました。そして今回、導きだされたものに対し、国連を通じて世界すべての国家と協議を行った結果、今日、全世界に向けて同時に会見をいたします」

そう切り出された会見を東京の家電量販店のテレビで見ていた僕は、それをただ聞き流していた。どうせ、たいしたことはない。どこかの国が戦争でも始めたとか、どこかで大地震が発生したのか。もしかすると、巨大隕石が地球をかすめるという予測かもしれない。それは確かに大事かもしれないと思うが、それ以上の事は考え

もしなかった。次の言葉を聞くまでは。

「その結果、非常に厳しい事態になると言わなければなりません。今年に入ってからの世界各地での異常気象、火山活動、大規模地震。それらの今後の頻度と災害時の状況から試算して、今後長くとも二年以内には地球上のあらゆる都市が壊滅し、我々、人類を含むすべての生物にとって非常に危機的状況に陥る可能性が高いと判断されました。これは地球規模のものであり、残念ながら、私達に残された道は宇宙進出以外になく、現段階ではその実現が不可能な状況です」

一瞬、すべての時間が止まったかのように、会話を聞いていた人たちは立ち止まった。そして、何かに突き動かされるように騒ぎ出す。

『これは何かの間違いだ。一体、何の冗談を言っているんだ！』

『やっぱり世界は終わるのか』

『いや、きつと今だけで何とかなるさ』

逃げる者、携帯電話で誰かに連絡する者、何事もなかったようにせせら笑う者。反応は色々だ。そんな騒ぎを横にして僕は歩き出した。近くで怒号と救急車のサイレンが鳴り響く。僕はそれをどこか遠くで聞いていた。

その日から全世界はパニック状態に陥っていく。それは無理もないことだと思っ。先進各国が対応に追われ、デモや略奪、犯罪が増加するなかで日本は今後一切外国への渡航を全面的に禁止した。つまりは、どこに行ってもその未曾有の天変地異から逃れる術が無いことを示したことになる。ある国では一種の終末思想が増大し、国全体が大規模な宗教となり、国民になれば未来は続くといったものまで現れた。日本は最初こそ騒ぎ立てたものの、他の国に比べると冷静だと感じられた。連日のように公開される資料と、災害に関する解説。そのどれもが、もはや回避不可能な事態だと伝えていた。そして、国外に出られないことでむしろ腰が据わったということなのだろうか。もちろん、人それぞれだが。

実際のところ、あと二年以内にさういう『世界崩壊』が起こると宣言されてもピンとこないものなのかもしれない。一時的に世界は治安が悪化したものの、結局はその状況から本当に脱することができないと分かると、意外にも騒ぎは収束に向かっていた。人間は割り切ってしまうものなのかもしれない。世界は、ある意味で抗うことを止めた。

そんな状況の中で僕は、両親からこれからどうしたいか？ という言葉に、すぐには答えることができなかった。

「どうだ？ 何か、やってみたいことくらい一つはあるだろう。例えば、島で暮らすとか。この状況で誰もやらないことか」

「僕はこの世界が崩壊するかどうか正直、分からないけど、父さんが言うように一度、小さな島で暮らしてみるのがいいかもしれない。面白そうだし」

確かに小さい頃から一度は離島で暮らしてみたいとは思っていた。今まで一人暮らしをしたことのない僕にとってみればまさに究極の一人暮らしかもしれない。

小さい頃、よく父が休みになると別荘へ連れて行ってくれた。別荘といっても、簡単な調理が出来るくらいの小さなもので、畑や手作りの露天風呂があるくらい。そういえば、もう何年も行っていないな。

「そうか。考えておく」

父はそう言っただけで部屋から出て行った。もちろん、ただ言っただけでまさか本当に離島で暮らすことになるとは思わなかった。

あの衝撃的な会見が行われる前に僕は高校を卒業した。高校時代は結構無茶をしたと思う。さすがに警察の厄介にはならなかったけど、無断で遠出をしたこともある。しかも徒歩で。家から四百キロ先の町まで行ったが結局はお金が尽きてヒッチハイクで戻ってきた。その時は父に思いっきり殴られた記憶がある。あれはかなり痛かった。一人で何日も別荘にもって研究と称してゲームをやっていたことも。周りからは結構、おとなしい性格とだと言われてきたけど、何となくそう言われるのが嫌だったからかもしれない。まあ、今思えば何をやりたかったんだかよく分からないけど、その時は楽しく、何とも言えない充実感があつたのも事実。

そんな過去があるものだから、父も自分で行っておきながらあれは冗談だ、とか場合によっては後で殴り倒されるかとも思ったけど、父の返事は意外な答へだった。「よく考えたことなら、私は反対しない。お前は一人暮らしをしたことがないからな。その代わり、他人を巻き込んだり、無茶をして死ぬなよ」

「母さんは、それでいいの？ 反対だって言うんなら無茶は言わないけど」

どんな言葉が返ってくるのか、心臓が張り裂けそうな緊張感の中で母さんは一言「別に良いんじゃないかしら。母さんたちも好きなことをしようと思っていたから」そう。ならよかったけど。でも反対、しないんだ？ 何となくこういう時には一回は反対されるのが当たり前のような気もするけど、きつと本当に問題ないのだろう。あれ？ でも、その前にとっても重大な問題が。

「本当に島に行けるのか？」

島で一人暮らしなんかできるのかという疑問はすぐに解消されることになる。父の知り合いが手配してくれるらしい。そして気が付くと、もう三ヶ月が過ぎようとしていた。僕自身、高校を卒業したばかりだったし、その暇を利用して自分ででき

るだけの情報や知識は何とか頭に詰め込んだ。サバイバルグッズやロープの基本、食べられる草木などなど。みんな無意味だと思いつつもそういった知識の本や道具は需要があるらしく、手に入れるにはさほど苦労はしなかった。

大変だったのは、農業の知識と簡単な機械系の技術。三ヶ月じゃ何ともならないので多少重くなるけど島へ持って行くことにした。

一度行ったらもう戻ってこれないかもしれない。そんな考えが頭に浮かぶ。不安な事は尽きない。でも一生に一度、思い切ったことをするなら、不安があるのは当たり前。後ははやるか、やらないかだ。

一応の準備が整い、僕が島へと渡る日。僕は両親宛に手紙を送った。僕が島に行った後に届くようにして。そうじゃないとあまりに恥ずかしくてしかたない。両親が僕に送った言葉は、期待通りだった。

「金は無いが、米とかは仕送り代わりに送ってやるぞ！」

船が風を切って海を走る。向かうのは僕がこれから暮らすことになる離れ小島。

それが式国島だ。

高精度の地図にはちゃんと名前が載っているけど、島の大きさは一周約、二・五キロメートルくらい。本土から近い割には交通の便が悪く、定期船も出ていない。近寄る人間もほとんどいなくなつたらしい。それでも明治の初期には人が住んでいた記録があつて、島自体は拓かれているという話だった。今は個人が管理していて、電気や給水設備は整っている。何でも、昔は漁業関係者がここを神聖な場所としていて海や風を祀る神社があり、月に一度は泊まり込みで世話をしていたらしい。そのおかげで人が住む環境は何も無いところよりはよほど快適だ、という話なんだけど。渡された写真だけじゃ詳しいことは判らない。

「式国島かあ。思ったよりは本土から近いんだな……。それにこの辺は波が穏やかな気がするけど」

「ああ。ここは元々いい漁場なんだ。今は地域が衰退してここで漁をする人間がいなくなつてしまつたけどな」

さすがに島に一人で来ることはできないので、地元の元漁師で今は不動産を扱っている父の知り合いにここまで乗せてもらつていた。話によれば、ここは地形が複雑で本島ならこんなに静かな場所ではないらしいけど、不思議なことに人が来ると穏やかになるらしい。

次第に式国島の輪郭が大きくなってくる。ここまでは何とか船酔いはしていないけど、緊張が高まっているせいか、お腹のあたりがムズムズしてきた。

そして、僕は式国島に降り立つ。

島の裏側は切り立った崖が広がっているらしいけど、このあたりは砂浜が広がっている。昔、使われていた船着き場もあり、簡単に降りることができた。

島に降り立った瞬間、本当は大学に進学する予定だったと思うと、少し笑ってしまふ。もつとも、この状況では教育どころではないみたいで、行くはずだった大学も希望者だけが入学し、後は友人と旅行に行くとか、何かを遺そうと必死になって動く人もいた。僕自身、勉強はそれほどできなかったけど、最後の高校生活は十分すぎるほど楽しかったと思う。友人に島で暮らすと言ったら、「骨は拾ってやれないから」と言われてしまったけど。両親は生まれ育った街で小さな駄菓子屋を開く予定らしい。母さんはそういう事が好きな性格だし、父はその営業担当だそう。小さな子供たちを招き入れては一緒に遊んだりして過ごすのが、いかにもあの二人らしいと思う。ただ、別荘はどうしようかと悩んでいた。まあ、この状況で買う人は……いるかも。

ぶおん、という船のエンジン音と共に、今まで意識していなかった波の音と、流れる風の音が飛び込んでくる。

「おい、坊主！ 後は、まあ、好きにやんな。それから何か困ったことがあったら迷わず無線を使えよ」

「はい。色々とありがとうございました」

「なーに、気にすることはないさ。元々、この島は売る予定だったんだ。それがこの時世じやな。それに、金持ちが買っても面白くないし」

長年、この島の管理をしていた人が亡くなり、この島の管理を引き継いだのが今の不動産屋さんだった。父が営業をしていたことが縁で知り合ったらしいけど、単純にお互い日本酒が好きで意気投合。そのおかげで僕はこの島に来ることができた。

荷物を下ろし、簡単な島の地図を見ながら、歩を進めようとしたとき、管理人さんから声をかけられた。

「明日、ボートを内緒で一隻送ってやる。選別にな！」

そう言うと彼は船に乗り込み、波を切って走っていった。僕はそれを見送りながら、ついに島へ来た現実が強くなっていくのを実感した。静かに流れる潮風が心地良い。ここまで来たら、あとは頑張るだけ。

島の地図を頼りに、小さな森を抜ける。踏み固めた道があり、住む小屋を探すのに苦労はしなかった。

裏側の崖のある場所は大きな森に覆われている。そこから鳥たちが一斉に飛び立っていった。後ろから聞こえる潮騒と合わさり、僕を不思議な気持ちにさせた。

世界の崩壊まで、あとどれくらい時間が残っているのだろうか。

この島での生活は予想していたよりは快適だった。管理人さんが住みやすいように島を管理してくれていたおかげで、田畑も一人で暮らすには十分な広さがあつたし、水も井戸から調達できた。電気も、太陽光と発電機の両方なら気にするほどじやない。木造の住まいは少し大きめの小屋といった感じだ。備え付けのベッドや机、本棚もある。さすがにエアコンは無いが。ここでは自給自足で生活することの大変さや、自分で考えなければならぬことが多い。自然と暮らす、共存する。苦勞は絶えないが、それが何とも言えない充実感を生んでいるのかもしれない。朝、一日の計画を立て、うまく様子を見ながらやっていく。夜になれば本を読み、次を考える。慣れてみると、これが面白い。そして、疲れを癒すために眠る。

響く鳥の声と、朝日。夜空に広がる星空はまだ世界が回っているということを実感させてくれる。そして、新しい一日が始まっていく。

それはいつもより強い風が吹いた日のこと。波は荒くなく、真夏に近づいてなお涼しい感じがした。近くで小さく鳥の声が響く。今日も、何事もなく始まって終わるだろう。僕はそう思っていた。

「明日は出始めた雑草を何とかしないと。放っておくと野菜の育ちが悪くなるし」夜になって僕はそんなことを独り言でつぶやいていた。

この時期は暖かい上に雨が降り、雑草の育ちがいい。放っておけば後で面倒なことになるのは間違いない。明日は根気のいる作業になるな。

部屋が少し蒸し暑いと感じて空気を入れ換えようと小屋の端にある窓を開けようとした時、不意に部屋の中で生暖かい風が起こる。思わず身体がビクツとして周りを見渡す。が、誰もいない。当たり前だ。この島には僕一人のほず。仮に誰かいたとしてもこの部屋にいるはずがない。それに、『風』なんて。もしかするとすきま風かもしれない。そう思いながら小屋の外に出た。穏やかな風が流れている。この時期には珍しく、透き通った空気と満月の空。風が微かに頬をかすめるくらい。ふと目を向けた先にあるのは僕自身もあまり入ったことのない森。この島で一番大きい森だけど、管理人さんによれば大昔は霊場として信仰があつたというが、今では奥にある小さな祠が蔓と苔に覆われているだけだ。一度だけ、せっかく島に来たのだからと寄ってみたけど、その後は行っていない。覚えているのは、祠には名前が無く、誰かに消されたというよりは元々、祠には名が無かつたようだった。

今回は体験版を読んで頂き、ありがとうございます。

続きが気になるなあ、と思われる方もそうでない方も、本編を宜しくお願いいたします。本編では、ラストに向かって意外(?)な展開が待っていますよ。